

修士論文（要旨）
2009年7月

イタリアにおける継承日本語教育
—国際結婚家庭の子どもたちを中心に—

指導 佐々木倫子 教授

国際学研究科
言語教育専攻
207 J 4901
浮田未砂子

目次

はじめに	1
第1章 研究の目的と背景	2
1.1 目的	2
1.2 背景	3
1.3 ミラノ補習授業校の概要	3
第2章 先行研究	8
第3章 調査概要	10
3.1 調査対象	10
3.2 調査協力者のプロフィール	12
3.3 文字化の原則	13
第4章 日本人保護者へのインタビュー調査結果	14
4.1 保護者の言語背景	14
4.2 家庭内使用言語および家庭内の日本・日本語環境	17
4.3 イタリア社会における親の志向性	20
4.4 子どもの日本・日本語環境	22
4.5 補習校について	30
4.6 日本・日本語の継承等について	34
4.7 子どもの現地校での様子、将来の教育	43
第5章 担任教師へのインタビュー調査結果	45
5.1 担任教師の言語背景	45
5.2 日本語クラスの児童・生徒について	46
5.3 指導・カリキュラム等について	51
5.4 児童・生徒の家庭環境等について	55
第6章 子どもたちへのインタビュー調査結果	60
6.1 調査概要	60
6.2 調査結果および分析	61
第7章 授業観察	78
7.1 授業観察の概要	78
7.2 分析の手法	79
7.3 分析の視点	79
第8章 考察	92
8.1 保護者の意識	92
8.2 教師の意識	95
8.3 分析を通して見えてきた子どもたち	96
おわりに	100
参考文献	
資料	

要旨

近年のグローバル化に伴い、越境する人々や国際結婚が増加し、多言語環境で育つ子どもたちも増加の一途をたどっている。これまでの在外教育機関である日本人学校および補習授業校は、ある一定期間の滞在を終えたら日本に帰国するという前提の日本国籍の子どもたちの義務教育機関であった。しかし、ここ数年来、特に補習校で日本語を学ぶ永住予定や帰国未定の子どもたち、国際結婚家庭の子どもたちの増加で、在籍児童生徒の背景や日本語力の多様化が進んでおり、それに向けた対応が新たな課題となっている。このような子どもたちに対する継承語としての日本語教育への関心やニーズが高まる一方、年少の継承語学習者は、日本語を使用する環境や学ぶ動機を持ちにくいと言われている（中島 2001；佐々木 2003 など）。

これまでも北米の日系人の継承語学校や補習授業校からは調査報告（佐藤 2003；ダグラス 2003；森 2005 など）や学齢期の日系国際児に継承語としての日本語教育を行う教育実践（カルダー 2008）が報告されている。

しかし、ヨーロッパには日系移民の歴史がなく、また在留邦人も少ない等の理由から補習授業校以外には、学齢期の日系国際児が日本語を学べる機関がきわめて限られている（奥村 2006）。また管見によれば、ヨーロッパにおける補習授業校での継承語教育の状況や可能性を探る研究は奥村（2006）以外にない。本研究は、イタリアの補習授業校の継承語クラスで日本語を学ぶ国際結婚家庭の子どもたちと保護者、担任教師に焦点をあて、問題山積みと言われている継承語教育の実態を明らかにし、今後の方向性を探ることを目的とする。

具体的に、本論文の研究目的はつぎの 5 つである。まず、当事者の真の声を拾い上げること。つぎに、イタリアに渡った新移住民と呼ばれる日本人の父親の特性を明らかにすること。また、複数の言語と文化が交叉するところでは人々の言語観・教育観はどのように揺れ動くのかを明らかにする。さらに、多言語環境のはざままで育つ子どもたちの社会的状況から継承語教育の実態と可能性を考察する。最後に、実際に教室では何が学ばれているのかを授業観察により分析する。

論文全体の構成は 8 章からなる。第 1 章は、研究の目的と背景、イタリアにおける日本語教育および言語政策、第 2 章では先行研究からの知見を述べる。第 3 章は調査概要、第 4 章から第 6 章までは、保護者、教師、子どもたちへのインタビュー調査結果を分析する。第 7 章では、授業観察から教師の発話と子どもの非言語行動に注目し、会話分析の手法を用いて授業を分析する。第 8 章では、インタビューや授業観察から明らかとなった分析結果をもとに統合的に考察する。本研究の結果をつぎのようにまとめる。

日本人の父親はイタリア志向でイタリア社会に軸足を置いているが、国民国家の枠にとらわれないトランスナショナルな意識を持っている。言語観・教育観は個人によって違いがあるが、日本語継承よりも英語や他の言語の習得に重きを置く傾向が見られる。授業分析からは、年齢相応の教材の不足、継承語教育の方法論の未発達から、子どもたちは学ぶ意欲を失いがちであることが明らかになった。しかし、在留邦人の少ない地域では補習校は母語コミュニティの重要な役割を担っている。海外子女教育の拠点としての重要性は言うまでもないが、継承語としての日本語を学ぶ子どもたちの育成も視

野に入れることを望む。親との接触を軸に子どもは言葉を学び、社会文化的存在として成長していくことを親に強く訴えるとともに、認知面の成長を視野に入れた継承語用教材と教授法の開発、日本語教育と年少者の言語教育の専門性をもつ教師の育成が急務となろう。

〈参考文献〉

- 石井恵理子 (1997) 「教室談話の複数の文脈」『日本語学』vol.16 No.3 明治書院 pp.21-29
- 奥村三菜子 (2006) 「ドイツの補習授業校における日本語教育に関する研究」東京学芸大学
大学院教育学研究科修士学位論文
- 海外子女教育振興財団 (2006) 「なぜ補習校？体験者の声から」『海外子女教育』3月号
- カルダー淑子 (2008) 「補習校における母語支援 -プリンストン日本語学校の実践から-」
MHB2008 年度大会
- 串田秀也・定延利之・伝康晴編 (2008) 「録音・録画データの共通転記記号」『単位としての
文と発話』ひつじ書房
- 佐々木倫子 (1996) 「日米対照：女性の座談 -発話文の数量的分析を中心に-」国立国語研
究所報告集 17
- _____ (2003) 「加算的バイリンガル教育に向けて-継承日本語教育を中心に-」『桜美林
シナジー』創刊号 桜美林大学
- _____ (2003) 「3代で消えない JHL とは？-日本移民の日本語継承-」『2003 年度日本
語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.242-245
- 佐藤郡衛 (2003) 「第三章 新しい海外子女教育の動向」『国際理解教育 多文化共生社会の
学校作り』明石書店 pp.71-103
- 鈴木一代 (2004) 「「国際児」の文化的アイデンティティ形成」『異文化教育』No.19 異文化
間教育学会 アカデミア出版会 pp.42-53
- _____ (2007) 「国際家族における言語・文化の継承」『異文化間教育』No.26 異文化
間教育学会 アカデミア出版会 pp.17
- ダグラス昌子・片岡裕子・岸本俊子 (2003) 「継承語校と日本語補習校における学習者の言
語背景調査」『国際教育評論』No.1 東京学芸大学国際教育センター pp.1-13
- 西阪仰 (1997) 「第1章 語る身体・見る身体」『語る身体・見る身体』山崎敬一・西阪仰 (編)
ハーベスト社 pp.3-29
- 長澤貴 (2003) 「授業を語ることのアポリア」『日本語学』vol.22 No.3 明治書院 pp.61-62
- 橋本満弘 (1993) 「非言語コミュニケーションの概念と特徴」『コミュニケーション論入門』
桐原書店 pp.175-178
- 中島和子 (1998) 『バイリンガル教育の方法』アルク
- _____ (2003) 「もう一つの年少者日本語教育 継承日本語教育の課題」『2003 年度日本
語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.241-242
- 藤森弘子・柏崎雅世・中村彰・伊東祐郎 (2006) 「日本人学校・補習授業校における日本語
指導の現状と課題」『日本語教育』128号 日本語教育学会
- 文野峯子 (2006) 「日本語教室談話の質的研究」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士
学位論文
- 森美子 (2005) 「二言語のはざままで育つ補習校の子どもたち」『言語教育の新展開』ひつじ
書房
- 茂呂雄二 (1991) 「教室談話の構造」『日本語学』vol.10 No.10 明治書院 pp.63-72
- 山崎敬一 (編) 『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣 pp. 26-35